

問答 むことの

徳長・朝金

絵：野口宣友



むかし昔、徳長に「歌問答」や「なぞかけ」を好む允右衛門というよくできた名主さんがあられました。名主さんにはお千代という美しく気立ての良い一人娘があり、近郷の男達の憧れの的でした。

文政2年、豪雨によって法勝寺川が氾濫し、徳長も大きな水害に見舞われ、多くの家や牛馬が失われてしまいました。名主さんの頼みで、朝金、浅井、金田などから大勢の人が駆けつけ、皆の献身的な手助けを借りて徳長の土地は甦っていききました。

この手伝いの中に、何事も一生懸命やり、地元の人々から大層好かれていた朝金の啓次郎という若者がいました。お千代さんは、男らしい啓次郎さんに夢中になり、風邪をひいていても、「啓次郎さんの顔を見ていたら治る」と言うほどで、これには啓次郎さんもまんざらではないようでした。

大方里も元通りになろうかという晩秋の頃、歌詠みの大僧正が名主さんの家を訪ねてきて、歌講宿が催されました。ところが皆のあまりに下手な歌詠みに、さすが

の大僧正もうんざりとしてしまいました。たまりかねた名主さんは、「え〜なんだな、うまく歌詠みをできた若い衆に、うちの千代の婿どのになってもらおう!」と言ってしまった。参加していた皆は、「とてもだねえが、歯がたねえだ」とみんなしり込みしていましたが、そこにつつと啓次郎が進み出てきて、「恐れながら、ただ今申し上げられました事、真でございましょうか?」と聞くので、「真、まこと、この允右衛門に二言はない!」と答えると、啓次郎さんは「へい!わかりました!」と言って、それきり徳長からも朝金からも姿を消してしまい、瞬く間に1年の歳月が経ってしまいました。

実は啓次郎さん、あの日以来、大山寺の寺男として修行をし、歌詠みを懸命に学び、先輩の雲水が舌を巻くほど歌詠みが上達し、「歌問答」も平気でこなせるようになっていました。新しい年を迎え、とんと講もあけた20日、啓次郎さんが徳長に戻ってきました。この日は名主さんの家に多くの歌詠み

が集まる日でした。座長の大方丈は「こたびのお題は「思うようにはいわざりけり」で結びます。ひとつ上の句付けで即答を賜りましょう」すると名主さんが「できました!」「洗い髪、油つけずに、丸鬘を おもつようには結わざりけり」と詠むと、次に「できました!」と手を挙げたのは啓次郎さんです。「ぼた餅を三つ一度に頬張って おもつようにいわれざりけり」と詠み、啓次郎さんの歌が一番良かったとたいそう褒められました。そして、「即答三段なぞかけに参りますぞ。『松竹梅とかけてなんと解く』と大方丈が言うと、啓次郎が「松竹梅とかけて風呂とときます。その心は『せがば(満員なら) 待つ(松)、ぬるきやあ焚け(竹)、熱けりやうめ(梅)』と答え、「見事!」と集まった歌詠みも賞賛の声を上げました。

名主さんは「文句なし! 気に入った。約束どおり千代は啓次郎に託そう」というと、啓次郎さんとお千代さんは大層喜びました。

おしまい